

## Vivienne's diary 2015 年 2 月

**2/12 (木)** : 2 月初めの特別な出来事はロイヤル・フェスティバルホールでのコンサートでした。私の息子のベンと、彼の妻トモカがアンドレアスと私を誘ってくれました。トモカは日本でピアノを 4 歳から 20 歳くらいまで習っていました。当時彼女達が住んでいたアパートはとても狭かったので、彼女の両親はグランドピアノの下で寝ていたそうです。プログラムはフランス。内田光子の演奏、虎がラヴェルのピアノ協奏曲を攻撃するため空を舞いました。トモカはこう言いました。他のピアニスト達は演奏する前に、美しい音を奏でる準備をしようと落ち着いて一呼吸するのだけど、**彼女**はどんな音を出すか弾く前から分かっていて、どの音も完璧に緻密で正確であると。

それからラヴェルの「子供と魔法」(呪文)。これはコンサート様式の上演でした。ステージにはオーケストラがいて、歌手はそれぞれが様々な役をこなし、それ用の衣装を合わせます。登場人物が変わる時にアクセサリーだけを変えることもありました。これはいたずら好きな男の子(若い女性ソプラノ歌手)が家に閉じ込められる話です。宿題をするのを嫌がり(彼は数学が嫌いです。数学もキャストのうちの一人です。)、親指を鼻頭につけ、「ママン」に向かってあっかんべーをし、彼に文句を言いに来た家財道具に怒り散らします。彼は踵でひじ掛け椅子の布を引きちぎり、中国製の茶碗がマグカップに「君のカップはどうなの？」と歌い、家財道具は、彼に壊されるのを怯えています。彼は籠の中にいるリスをいじめ、火遊びもします。いたずら好きな男の子の部屋はオーケストラの後ろの一段高い所がありました。しかし歌手は全員自由に、ほとんどオーケストラの前をぶらついていました。コンサート様式の上演では、そこにオーケストラがあるから、内装と演技は特にのびのびと、生き生きしているように思えます。

ラヴェルは独創的で創作に富んでいます。魅惑的でまぶしくて、本当にフランス人ですね。とてもシックです。精神的な方法で、気分を高揚させてくれます。



モンフォアの自宅で撮影されたラヴェルの机。

原作はコレットです。若いコレットはフランスの知識人達のペットでした。田舎での彼女の思春期と成長期の話、小説クローディーヌはセンセーションを巻き起こしました。ベルエポック時代のフランスのフランスらしさを取り入れたいならば、ピカソ、ルノワール、シャネル、オフエンバック、プルースト、ランボー、ジョセフィン・ベーカー、コクトー、キリがないですね。ボヘミア、サロンと、とにかくコレットを読むことです。この時代は西洋世界における知識人達のピークでした。「善良なアメリカ人は、死ぬ時はパリへ行く」と言われていたほどです。

**2/22 (日)** : レッド・レーベルコレクションが良いタイミングで送られてきました。このタイミングだとショーまでに十分時間があるので、色々くっつけて、楽しむことができます。マリーがオーガナイズしました。彼は超パンクなジュエリーを作るため、ジュエラーと一緒に頑張っていました。また、ヘアとメイクアップのテーマをパンクと提案しました。私はいつも女の子が自分でしたようなメイクを見るのが好きです。モデル達も気に入っていました。

私はレッド・レーベルの女の子についてプレスリリースにこう書きました。

# VOTE GREEN

レッド・レーベル 2015/16 秋冬

レッド・レーベルを着る女の子。その子について話をします。彼女はちょっと私みたいなのよ。ラッキーなことに田舎で生まれ、17歳の時に家族と一緒にロンドンへ引っ越します。彼女は木の名前を全部知っていて、いつも読書をし、ロンドンへ越して以来いつでも美術館へ足を運ぶくらいアートが大好きです。そして彼女は、文化はとても、とっても重要だと思っています。もし私たちに真の文化というものがあるならば、私たちが今居る現在の状況にはならなかったはずです。文化は、消費に取って替えられてきました。でもそれでは話が違うのです。

現状、私たちの世界は、世界の人口の1%の権力を持った人達に支配されています。その人たちは消費することを説き、戦争を説き、人類を惨事へと引き込んでいます。私たちは、今、ものすごく危険な状態の中にいます。他の政党に投票しても何も変わらない。だから彼女はグリーンに投票します。



と言うのですが、彼は（多分）そして彼女も、それは形式上のものだと知っているのです。

なぜシェークスピアは、ダンカン王にこんな返事をさせる必要があったのでしょうか。おそらく本物の王（ジェームズ 1 世）への興味とお世辞のためではないでしょうか。王である以外に普通ではないことを言い、ダンカン王は無作法に、しかし好意的に自身の優勢を築き上げます。私たちは興味をそそられ、彼を実在する人間のように見なします。そのことにより、劇自体が現実に目の前で起きているかのように感じさせられるのです。もしマクベスが彼を殺すならば、彼は私たちが今知っている男を殺すことになるのです。

シェークスピアは、どこかから他の経験や見解を集めてくることによって、このような思考を持っていたに違いありません。創案は繋がりを作ることです。（そして一個人がどのように知識を得るかでもあります。）彼のドラマはこういった思考を生かす手法でした。アイデアを一緒にするのです。（今私が解説したことは、仕事における想像力です。）

私がこの引用文について触れるのにはもう一つ別の理由があります。それは私自身にも当てはまることだからです。人が私に気付き、写真を頼まれたり、時々サインを頼まれたりすることがあります。大体の場合は嬉しいのです。知らない人と話せますし、1分程度しかかかりません。しかし2度ほど断り、後悔したことがあります。そしてまた同じことをしてしまいました。アンドレアスとレッド・レーベル・ショーの前夜にコモンを歩き、アイスクリーム屋さんに入りました。10歳か11歳くらいの、6,7人の女の子達がそこにはいました。彼女達はまだ幼くてとってもかわいらしくて。そのうち一人が私に気付き、写真を頼んできました。私はちょっとストレスを抱えていて（ゴールド・レーベルのことを心配していて）、突如こんなにたくさんの子供達に付き合い、お店の中に居る人達全員から見られるのは無理だと感じました。私はただ立ってお店を出てしまいました。そうしなければならなかったのよ！家に帰り着いた時、アンドレアスがもう一度お店に戻ろうよと言うくらい、私はとても落ち込んでしまいました。だけでもう遅すぎる、彼女達はもうそこには居ないだろうと思いました。とにかくこうすべきだったので。それから2日間、惨めな気持ちで過ごしました。

シェークスピアをとっても深くするのは、彼が人類は宇宙の一部だと感じていることです。私たちの野心は、私たちが持つ真の人間の可能性に勝手に気付かないふりをし続けています。

—Thou sure and firm-set earth,  
Hear not my steps, which way they walk, for fear  
Thy very stones prate of my where-about,  
And take the present horror from the time,  
Which now suits with it.—

どっしり据わった不動の大地よ、  
俺の足音を聞くな、足音の行き先を知るな、  
玉砂利どもがお喋りし、闇夜の時に相応しい  
この静寂をかき乱し、俺の居場所を知らせてしまう。

時間と恐怖が一つに結合します。とても強烈なのは、彼のエネルギーのピントです。それは他の全てのエネルギーがそこにズームインするほどです。石もエネルギーで、時間もエネルギーです。おそらく全ての物がエネルギーなのです。マクベスの罪への恐怖はこの中庭に永遠に閉じ込められることになるでしょう。（これは幽霊、このエネルギーの受信者となる媒体、を説明付けるもののうちの一つです。）